

## 書評

CO<sub>2</sub>ダブル

著者：柳沢幸雄  
 発行：三五館  
 定価：1,400円（本体価格）  
 評者：内山洋司（財電力中央研究所）

人類に忍び寄る危機として騒がれている地球温暖化。本書は、米国のハーバード大学で国際的に活躍してきた著者が、温暖化問題のメカニズム、影響、および対策について綴った一冊だ。

題名「CO<sub>2</sub>ダブル」を見て、一瞬、ダブルとは何かと思う。それは、人類が精一杯の努力をしても21世紀末には大気中のCO<sub>2</sub>濃度が産業革命前の2倍になってしまうことをいう。著者はその必然性を本の中で説明している。さらに、温暖化についての解説だけでなく、対策に対して戦略、決断、および対処について述べている。

第二章の「温暖化のメカニズム」は、一般の人にとって複雑で理解しにくい温暖化現象をわかり易く書き著している。第三章は様々な技術対策によって将来の大気中のCO<sub>2</sub>濃度がどのように変わるか分析している。第四章の「温室効果の大影響」は読み応えがある。将来の被害の恐れと影響の大きさを、海面上昇、感染症、

植生変化について詳しく記述している。

さらに五章と六章では将来の破局として3つの最悪シナリオを描いている。最初はCO<sub>2</sub>のパイの争奪戦による国家間の闘争である。そのシナリオは多くの犠牲をだした上に温暖化を加速してしまう。原子力に頼るシナリオでは、事故や放射性廃棄物だけでなく、戦争や内乱時に原子力発電所が攻撃対象になるリスクを問題視している。世界がCO<sub>2</sub>抑制に失敗して温暖化が進み、海面上昇、伝染病の蔓延、森林の衰退などが加速し、地球が暴走するシナリオもある。

将来の破局を回避する有効な手段として人口抑制が大切になるという。小子高齢化のもとで活力ある社会を築くことが、CO<sub>2</sub>を抑制することであり、また将来の途上国の模範として望ましいことであると指摘している。また第六章の「私はこう考える」で著者はCO<sub>2</sub>抑制のための手段として国際炭素税を提案し、その税収を森林維持費に回して持続可能な発展を主張している。

一般にこの種の本はとかく解説的なものが多くおもしろくないが、本書は難しい問題を著者の豊富な経験と知識により身近な例にたとえて肩が凝らないで読ませるようにしている。地球規模の環境問題に携わる人は参考になる考え方が本書から多く読みとれるだろう。

## 書評

## 地球の大気と環境

著者：田中俊逸、竹内浩士 共著  
 発行：三共出版(株)  
 定価：1,500円（本体価格）  
 評者：小山 清（大阪市立工業研究所）

地球環境サイエンスシリーズの第3巻であり、このシリーズは、環境に関するさまざまな問題を科学的に浮き彫りにし、環境問題の正しい理解とその原因や対策について解説することを目的としている。現在大気汚染が進行していることはいうまでもないが、それによって地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨など大気を介した地球規模での環境問題が起こっている。

本書は大気と地球環境との関連を理解するために、第1章では大気の構造とその役割、第2章、第3章では地球温暖化問題とオゾン層の破壊についてその原因とメカニズムと対策、第4章では大気を通じて拡散さ

れる有害物質の現状とその影響、第5章では大気を守るための国際的な、また日本の取り組みについて記述している。著者らは、大気汚染から生じる各種の問題に対する対策においてわれわれの生活にある程度の制約が伴うことは免れないし、便利、快適、効率なものの上位に地球環境の問題をおくという判断基準において社会システム全体を見直す必要があると提案している。全体的に見て、基礎的な内容が豊富に取り入れられ、図表も多く取り入れられ、大変理解しやすく解説されている。また、これらの基礎的な知識を持っておられる読者に対してはコラム的な内容として少し専門的な解説もされている。

一般の社会人で地球環境問題について関心をもっておられる方や専門的にこれから学習を始めようとする方の入門書としてよい書籍であると考えられ、一読をお薦めできる。本書を読まれ、大気汚染と地球環境問題の理解が進めば、氾濫している情報などの理解や整理が行いやすくなるものと考えられる。